



甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

Mar. 1991

No. 93



Geotrupes amoenus JACOBSONH について

〔日本産コガネムシ類に関する考察(3)〕

藤岡昌介

考察(1)、(2)に続き、日本を基産地とする疑問種について述べてみたい。

Geotrupes (原記載では *Geotrypes*) *amoenus* は JACOBSONH (1893) によって、Japan: Jeso (A. BIRULA, VIII, 1889) の標本により記載された種である。日本では中根 (1952)、野村 (1960) などによって紹介されている。

筆者は、日本においてこの種が採集されたという事を知らない。そこで、この種とその近似種について検討してみた。

この種は原記載によると、上記標本は♂で体長25 mm、*stercorarius* に近縁であるが、色彩、上翅の条溝の点刻、上翅の先端部、前脛節下面の突起部などにより区別できるとし、*stercorarius* と比較しながらかなり細かく記載されている。

この種について、LEWIS (1895)、BOUCOMONT (1902)、野村 (1960) は *laevistriatus* のシノニムとして扱っており、BOUCOMONT (1912)、中根 (1952)、BERLOV (1979) は *stercorarius* の亜種あるいは変種として扱い、BOUCOMONT (1904)、NIKOLAJEV (1975)、ZUNINO (1984)、GREBENSČIKOV (1985) は独立した種として扱っている。そのうち、BOUCOMONT (1904) は、LEWIS が *amoenus* を *G. (Phelotrupes) laevistriatus* のシノニムとして扱っているのは間違いであり、*Geotrupes* 亜属の種であることを指摘している。また NIKOLAJEV は *Geotrupes* 亜属に含まれる各種の♂の前脛節を図示している。さらに GREBENSČIKOV は、従来 *G. stercorarius baicalicus* REITTER として記載されていたモンゴル産の個体は *amoenus* であるとし、その分布はモンゴル・中国・日本であるとしている。中根は日本での分布に疑問を表し、後藤 (1955) も同様の考えを示し、塚本 (1973) は中根の論文を引用している。

上記の各論文や JEKEL (1866)、REITTER (1893) 等を検討すると *stercorarius*、*baicalicus*、*amoenus* の違いは主として色彩や、♂の前脛節下面の突起の数や形にあることがわかる。

この *amoenus* は *Geotrupes* 亜属に含まれることは明らかであり、現在、確実に日本に産する各種は

Chromogeotrupes・*Eogeotrupes* 亜属 (従来 *Phelotrupes* 亜属として扱われていた) に含まれる種である。海外の研究者の多くが、本種が日本に分布するとしているのは、すべて原記載からの引用であると思われる。なお、調べた範囲では樺太からの記録も見出されなかった。

以上のことから、現時点においては、*Geotrupes amoenus* JACOBSONH は日本の昆虫相からは除外しておくのが妥当であると思われる。

引用文献

- BOUCOMONT, A. (1902) Coleoptera lamellicornia fam. Geotrupidae, in *Genera Insectorum* 7. 20 pp. 1 pl. P. Wytzman ed., Bruxelles.
- (1904) Étude sur les Enoplotrupes et *Geotrupes* d'Asie. *Rev. Ent., Caen*, 23: 209-252.
- (1912) Scarabaeidae: Geotrupinae. In W. Junk, *Coleopterorum Catalogus, pars* 46, 47 pp. S. Schenkling, Berlin.
- 後藤光男 (1955) せんちこがね科. 原色日本昆虫図鑑, 甲虫編 274 pp. 大阪.
- GREBENSČIKOV, I. (1985) Remarks on Distribution and Systematics of Laproctist Scarabaeoidea (Coleoptera) Known from the Mongolian People's Republic. *Mitt. zool. Mus., Berl.*, 61(1): 105-136.
- JACOBSONH, G. (1893) Ein neuer *Geotrypes* aus Japan. *Horae Soc. ent. Ross.*, 27(1892-1893): 120-121.
- JEKEL, M. H. (1866) Essai sur la Classification naturelle des *Geotrupes* Latreille et description d'espèces nouvelles. *Ann. Soc. ent. Fr.*, (4)5, (1865): 513-618.
- LEWIS, G. (1895) On the Lamellicorn Coleoptera of Japan and Notices of others. *Ann. Mag. nat. Hist.*, ser. 6 vol. 16: 374-408.
- 中根猛彦 (1952) 日本のこがねむし (II). 昆虫学評論, 6(3): 21-24, 2 pls.
- NIKOLAJEV, G. V. (1975) Review of species of the section *Geotrupes* s. str. (Coleoptera, Scarabaeidae). *Nasekomje Mongolii*, 6(3): 110-113.
- 野村 鎮 (1960) 日本産コガネムシ類目録. 桐朋学報, 1 (10): 39-70.
- REITTER, E. (1893) Bestimmungs-Tabelle der Lucaniden und coprophagen Lamellicornen des palaearcti-

schen Faunengebietes. -Verh. natur. Ver. Brünn, 31, (1892): 3-107.
 塚本圭一(1973)食糞性コガネムシ群についての考察II. 平安学園研究論集, (17): 25-46, 10 pls.

ZUNINO, M. (1984) Sistematica generica dei Geotrupinae, filogenesi della sottofamiglia e considerazioni biogeografiche. *Boll. Mus. Reg. Sci. nat., Torino*, 2(1): 9-162. (東京都北区)

○ヨツボシシロオビゴマフカミキリ秋の記録・その後

1989年9月16日に東京都高尾山で、本種を野外にて採集したことは、筆者が甲虫ニュース86号に記録した。この時の採集状況があまりにも偶然的要素が強すぎ、翌年(1990年)もまた秋に採集できるものか気掛かりだったので、再度調査を試みた。

1990年9月1日に、神奈川県逗子市に在住されている、カミキリ屋の大先輩である青柳鷹之介氏と高尾山を訪れ、前年と同じ稲荷山ハイキングコースで採集を試みた。その結果、前年モミの生葉をピーティングして本種を採集したところから、100~200mほどしか離れていない場所のモミの細い枝のピーティングで1♂を採集できた。直径15cmほどの生木から出ている親指ぐらいの枝で、ピーティングしたときは生枝と枯れ枝を同時に叩いたので、どちらから落ちたかは不明であった。

9月9日に2人で再度訪れ(この間青柳氏は9月4日にも採集を試みたが零敗を喫した)、青柳氏が直径4~5cmで高さが1mにもならないモミの木、やはり親指程度の新しい枯れ枝をピーティングして1♂を採集。筆者も9月1日に採集した全く同じ枝(今回は枯れ枝のみを叩いたら落ちた)より1♀を採集できた。

さらに、9月23日に青柳氏が一人で挑戦。9月9日に青柳氏自身が採集したその枝から1♀(この枝はさんざん眺めてみて、見つからなかったので叩いたとのこと)を、もう1♂をやはり頭ぐらいの高さのモミの枯れ枝(親指程度の新しいもの)から採集された。

その後2週間は週末に台風が来て調査ができず、10月14日(この日も予報は雨であったが、はずれて晴れたので午後から出掛けた)と10月21日に同様の採集を試みたが両日とも不発に終わった。

このことから推察すると、ヨツボシシロオビゴマフの成虫は高尾山では8月末から9月下旬までは、モミの細い新しい枯れ枝にいることは、かなり確実なものと思われる。

この年はピーティングを主としスイーピングはあまり行わなかったため、高い場所のモミの細い枯れ枝にもいるものなのかは不明である。このような場所のスイーピングはかなり非能率的(労多くして益少ない)な採集と考えられるので、体力のある若い方に頑張ってもらわないと解明がむずかしそうだ。我と思わん方はぜひお試しあれ。

稲荷山ハイキングコースにはモミの大木が相当あり、オオトラカミキリの古い食痕もかなり目につく。もちろん若木も多いが、なぜかヨツボシシロオビゴマフが採集される場所は登山道の両側で、林の中に入ってしまうと、それほど暗いわけでもないのに結果的には採集されていない。カミキリが一般的に好む林縁がやはり良いのであろうか。採集された場所は標高400~450mぐらいで、ハイキングコース中ほどのあずまや(トイレもある)のあるところから上へ200mほどの範囲である。

10月以降はどのような所にいるのか、興味ある問題が残された。なお、10月21日にはモミの生枝のピーティングでタテスジゴマフカミキリが3頭採集された。もちろん非常に新鮮な個体であった。

(神奈川県逗子市、露木繁雄)



(Aポイント)
 右手前の細い
 モミの木の
 下枝



(Bポイント)
 中央の細い
 モミの木の
 右枝

ヒメキンスジコガネの学名について

三宅 義一

ヒメキンスジコガネは日本のキンスジコガネ *Mimela holosericea* (FABRICIUS) に似た体形や色彩、光沢があり、台湾産スジコガネ類の中でも最も美しい種のひとつであろう。

キンスジコガネに類似しているという理由で新島・木下両博士 (1927) によって別属ではあるが *Anomala holosericioides* という、まさにぴったりの種名がつけられた。その後、加藤 (1933) の図鑑にも掲載され、最近では小林 (1984) が再記載をおこない図示している。

ところが、以前台湾産スジコガネ類を調べたとき気になる種があった。BATES が、やはり台湾から記載した *Anomala corrugata* (1866) である。この種は新島・木下 (1927) によって再記載されてリュウキュウスジコガネの和名が与えられ、三輪・中条 (1939) の目録にも採録されている。最近では小林 (1984) によって再記載、図示され、タイワンサクラコガネの和名がつけられた日本産のサクラコガネやツヤコガネに類似した種である。しかし、種小名の示す *corrugata* つまり“しわの多い”はこの種に似つかわしくないし、原記載には“翅鞘縫線と翅脈(隆線のこと)を除いた上面のいたるところが粗い、融合した点刻でおおわれる”ことになっているが、このリュウキュウスジコガネないしはタイワンサクラコガネのほうは全くそれに合致しない。

そこで若しやと思ってヒメキンスジコガネを調べてみたいと思ったが、この種は分布が局地的なためか、もともと大変な珍種なのか、私自身はもちろん、知友諸氏の採集品の中にもこの種を見出すことはできなかった。ところが黒沢良彦博士が日米科学協力研究の学術調査に参加された際 1965 年 6 月 23 日、台北県の Pinglin (坪林) で採集された 2 個体を貸していただいて実際に記載と標本を照合することができ、*Anomala corrugata* は、実はヒメキンスジコガネにほかならないことが判明した。つまり新島博士らの学名は全体の印象でこの甲虫をとらえたの

であり、BATES のは細部の構造の特徴で命名したとすることができる。実は、このことに気づいたのは随分以前のこと、黒沢博士から標本を拝借して以来、ここでは書けない位長い間不義理をしたことになる。最近ある事情で台湾のコガネムシ類を調べることになり、リュウキュウスジコガネ、タイワンサクラコガネのほうの学名を決定しなければならなくなった関係でこの小文を書くことになった。黒沢博士に深くおわびとお礼を申し上げたい。なお、上記 2 種の学名を整理すると次のようになる。

Anomala corrugata BATES, 1866: 343. ヒメキンスジコガネ
Anomala holosericioides NIJIMA et KINOSHITA, 1927: 50, 85, pl. 3, f. 9; KATO, 1933: pl. 27; H. KOBAYASHI, 1984: 17, F. 2. (syn. nov.)

Anomala siniopyga OHAUS, 1915: 329. リュウキュウスジコガネ (タイワンサクラコガネ) *Anomala corrugata*: NIJIMA et KINOSHITA, 1927: 39, pl. 1, f. 27; H. KOBAYASHI, 1984: 20, f. 9. (nec BATES, 1866)

引用文献

- BATES, W. (1866) On a collection of coleoptera from Formosa, sent home by R. Swinhoe, Esq. H. B. M. Consul Formosa. *Ann. Soc. Lond.*: 339-355.
加藤正世 (1933) 分類原色日本昆虫図鑑 8: 50 pls. 東京, 厚生閣.
小林裕和 (1984) 台湾のコガネムシ (10), 月刊むし, 155: 17-20.
三輪勇四郎, 中条道夫 (1939) 日本産鞘翅目分類目録. 金龜子虫科: 台北, 野田書房.
NIJIMA, Y. et E. KINOSHITA (1927) Die Untersuchungen über japanische Melolonthiden (III), Erst Nachtrag der Melolonthiden japans und ihre Verbreitung. *Res. Bull. Coll. Agr. Hokkaido Imperial Univ. Sapporo, Japan*, 4: 97, 3 pls.
OHAUS, F. (1916) H. Sauter's Formosa-Ausbeute: Rutelinae (Col.). *Arch. Nat. A.* 4: 1-8, test-figs.
(東京都多摩市)

○ヤスマツケシタマムシの越冬

新潟県のヤスマツケシタマムシ *Aphanisticus yasumatsui* Y. KUROSAWA については、本誌第 1 号に報告したが、その後県南部地方からも 2 度ほど記録されている。

最近筆者は本種 1 頭をベルレーゼによって採集したが、その状況からみて越冬中であつたものと思われるので記録しておきたい。

黒沢良彦博士によれば同属のクロケシタマムシは石下等で越冬することなどから、本種も成虫越冬だろうと推定はされていたという。落葉樹や草本の潜葉虫の場合、秋に枯れ落ちる葉の中で幼虫のまま越冬する事は不可能なので、成虫で越冬するのはむしろ当然と思われるが、その態様は不明であった。

今回ベルレーゼの材料を採取したのは、新発田市大字黒岩地内の山林でアカマツを主体とし、多少の雑木が混生する標高約 100 m の山である。1990 年 11 月 6 日、この山の高さ約 30 m の場所で、ヒサカキの老木の下で落葉と土を 5 mm 目のふるいでふるって落ちた土を持帰り、ベルレーゼで処理してゆくうちに出現したものである。そのため、越冬場所が落葉下か或いはその下の土の中かまでは分からないものの、本種がおおよそこの様な場所で成虫越冬するのは間違いないと思われる。

末筆ながらいろいろと御教示を賜わり、かつ発表をお勧め下さった黒沢博士に御礼申し上げる。

(新潟県新発田市, 小池 寛)

○西日本におけるオオヒメゲンゴロウの記録

オオヒメゲンゴロウ *Rhantus erraticus* SHARP は北海道・本州に分布し比較的稀な種と考えられていたようである。従来知られている西限記録は岡山県中和村¹⁾であり、中部地方以西では大阪府四條畷市²⁾、茨木市²⁾、滋賀県今津町²⁾、京都府宇治田原町²⁾、岐阜県恵那市³⁾の記録がある。今回上記の記録と重複する所もあるが筆者の採集例及び若干の生態的知見と、新しい西限記録を含む筆者の知り得た採集記録を報告しておく。

1) 1♂1♀, 大阪府四條畷市室池, 9. ix. 1989, 北山昭採集。

八木(1989)と同じ産地と思われる。放棄水田に多数のオオコイムシとともに生息していた。

2) 1♂1♀, 滋賀県大津市途中町, 25. viii. 1990, 北山昭採集。

杉林に隣接した水田より得た。近くの放棄水田にはクロゲンゴロウとおびただしい数のヒメゲンゴロウがいた。

3) 多数, 石川県輪島市三井町, 16. ix. 1990, 北山昭・芦田久採集。

4) 1♂4♀, 大阪府高槻市中畑神社, 14. x. 1990, 北山昭採集。

薄暗い神社境内の直径 5~6 m, 水深 50 cm ぐらいの池より得た。今までの経験から本種は膝まで潜るような非常に泥深い所に生息していると思っていたが、ここでは落葉の堆積した特に泥深くもない池より得られた。大きなイシガメが2匹泳いでおり他のゲンゴロウ類は見られなかった。

5) 10頭, 大阪府茨木市銭原, 10. xi. 1990, 北山昭採集。

6) 2頭, 兵庫県神戸市北区大沢町, 13. i. 1991, 森正人採集。

干上がった小さな池にあった直径 15 cm ぐらいの倒木下でツブゲンゴロウやヤゴの一種とともに越冬していた。

7) 2頭, 広島県芸北町八幡高原, 3. xi. 1990, 岡田裕之採集。

本種の西限記録になるとと思われる。牧場内にできた水溜りより採集したとのこと。

8) 8頭, 三重県上野市西山, 14. x. 1990, 森正人採集。

9) 5頭, 京都府南山村, 14. x. 1990, 森正人採集。

10) 5頭, 富山県福光町能美, 19. viii. 1989, 森正人採集。

末筆ながら記録の発表を快諾された森正人, 岡田裕之両氏ならびに種々御教示賜り発表を勧めて下さった阿部光典氏にお礼申し上げる。

参考文献

- 1) 山地 治(1990), すずむし, 124: 11.
- 2) 八木 剛(1989), UNKOROGASI (野尻湖昆虫グループ連絡紙), No 44: 2~13.
- 3) 長谷川道明(1989), 甲虫ニュース, 85: 6.
(吹田市, 北山 昭)

○セスジゲンゴロウ類の採集記録

Copelatus セスジゲンゴロウ属の甲虫は中型のゲンゴロウ類の中でも同定が困難で、また生態的にも多様な興味深い一群である。筆者は九州北部沿岸の島々や琉球列島において本属のゲンゴロウを採集することができたので、その結果を報告する。(採集データ中採集者はすべて筆者)

1. *Copelatus andamanicus* RÉGIMBART リュウキュウセスジゲンゴロウ

2♂♂2♀♀ 他多数, 沖縄本島国頭村伊江林道, 16. iii. 1985.

1♂, 沖縄本島国頭村与那, 11. x. 1986.

1♀, 奄美大島油井岳, 12. v. 1983.

伊江林道のもはスダジエ林床の湿った落葉の中から多数採集された。佐藤先生によればセスジゲンゴロウ属のいくつかの種類ではこのように落葉中によく生息していることがあるとのことである。他の2地点で採集された個体はいずれも灯火採集に飛来したものである。

2. *C. japonicus* SHARP セスジゲンゴロウ

1♂1♀, 佐賀県鎮西町馬渡(まだら)島, 8. viii. 1981.

馬渡島で採集した本種とホソセスジゲンゴロウは灯火にて採集したものである。

3. *C. teranishii* KAMIYA テラニシセスジゲンゴロウ

1♂, 長崎県対馬美津島町玉調, 4-5. v. 1990.

本種は従来本州からのみ知られており、対馬からは初記録となる。採集地は細い入り江に接続する広大な湿地で、水草が繁茂している。水生甲虫類は他にコガシラミズムシやガムシ類を採集したが、ゲンゴロウ類は少ないようで、本種とマメゲンゴロウを各1頭得たのみであった。

4. *C. weymarni* BALFOUR-BROWNE ホソセスジゲンゴロウ

1♂, 佐賀県鎮西町馬渡島, 8. viii. 1981.

1♀, 長崎県上対馬町三宇田, 4-5. v. 1990.

本種は対馬からは新記録である。上の2例とも灯火に飛来したものを採集した。

末筆ながら、以上4種を同定していただき、分布に関するコメントを戴いた名古屋女子大学生物学教室の佐藤正孝先生に厚く御礼申し上げます。

(九州大学農学部, 野村周平)

○アトホシヒラタマメゲンゴロウの石垣島からの記録

アトホシヒラタマメゲンゴロウ *Platynectes chujoi* M. SATO は阿部(1989)などによると西表島固有種として知られているが、今回石垣島産の標本を見る機会があったのでここに記録しておく。

1♀, 28. iv. 1990, 沖縄県石垣島屋良部岳, 赤羽孝之採集。

この個体は屋良部岳の林道奥の伐採地でのライトトラップにより採集されたもので、付近に小さい沢が有りそより飛来したものである。

最後ではあるが、標本を検査する機会を与えられた東京農業大学の赤羽孝之氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

- M. SATO (1982) Two new *Platynectes* species from the Ryukyus and Formosa (Coleoptera, Dytiscidae). *Spec. Iss. Mem. Retir. Emer. Prof. M. CHUJO*, 1-4.
阿部光典 (1989) 沖縄県産 *Hydradephaga* の記録, 甲虫ニュース Nos. 87, 88, 9-12 p.

(東京農大, 松本浩一)

○栃木県でのオオイチモンジシマゲンゴロウの記録

オオイチモンジシマゲンゴロウ本州亜種 *Hydaticus pacificus conspersus* RÉGIMBART は筆者の知るかぎりでは山形県, 宮城県, 茨城県, 埼玉県, 千葉県, 東京都より知られているが今回栃木県より採集することが出来たので報告する。

1♀, 栃木県下都賀郡野木町友沼, 3. v. 1990, 和泉敦夫採集。

チョウセンマルクビゴミムシを採集する目的で渡良瀬遊水池をおとずれた時, 遊水池よりやや離れた友沼附近の思川河川敷に広がるアシ原の一角に雨水の溜まった畳 1/4 帖ぐらいの小さなきたない水溜りを発見し, 下に溜った落葉を水ごと手グワでかき寄せた所, 本種が泥まみれになって現われた。茨城県で採集した所は流れの早い清流であったので, まったく環境の違う所で採れたことに驚いたしである。なお目的のチョウセンマルクビゴミムシも 1♂採集することが出来た。末筆ながら当地を御案内下さった伊勢崎市の須田 亨氏に心よりお礼申し上げます。(東京都大田区, 和泉敦夫)

○ *Laccophilus flexuosus* の記録について

本誌 No. 91 に *Laccophilus flexuosus* AUBÉ が琉球諸島に生息することが阿部光典君によって報告されているが, 同時にこの種の日本からの以前の記録について述べられている。私はこれについて少々気になったので, 文献を見直した結果次のことが確かめられたので以下に記しておくことにしたい。

Laccophilus flexuosus の名は SHARP (1873) の日本産水生甲虫の論文に既に現われ, LEWIS (1879) のリストにもあり, SHARP (1882) の水生甲虫 (ゲンゴロウ) のモノグラフでも, 阿部君が述べたように, 日本が分布に加えられている。しかし RÉGIMBART (1889) は SHARP (1882) が *L. flexuosus* としたものは真の *flexuosus* ではないとし, それに対して *sharpi* の名を与えたのである。したがって, これ以前の SHARP による日本からの *flexuosus* の記録は *sharpi* と読みかえられねばならない。

神谷 (1938) が *L. formosanus* TAKIZAWA を *L. sharpi* のシノニムと見なしたのは, 現在から見れば軽率のように見えるが, 似たような波状紋をもつ前種を当時区別できなかったとしてもやむをえなかったかも知れない。

文献で助力をえた大原昌宏君に感謝する。

(千葉県, 中根猛彦)

○オニユリを食べるカタクリハムシ

1989年の春に庭先のオニユリの萌芽にかなりの数のカタクリハムシ *Sangariola punctatostriata* (MOTSCHULSKY, 1860) が発生し, 葉を食害し, とうとう1株は枯死してしまった。1988年までは自宅の付近で本種を見かけたことはなく, どうして1989年になって突然発生をしたのか全く理由がわからない。オニユリに隣接してホトトギス, シオデなどが植えてあるが, これらの植物には全く被害はなく, 10余本のオニユリにばかり被害が集中していた。どの植物も庭に植栽してからすでに10余年になるので, これらに付着して庭にやって来たとは考え難い。

1♂6♀♀, 東京都世田谷区岡本, 15. v. 1989, 黒沢良彦採集。4月下旬から発生し多数の個体を目撃したが, そのうち上記7頭を採集した。

本種は, 往時は武蔵野に広く分布していたけれども稀な種類でもなかったが, 今ではほとんど見当たらなくなりました。

なお, 今年 (1990) は4月から6月にかけて注意を怠らなかつたつもりであるが, ついに1頭も発見することが出来なかつた。また今年にはオニユリの発芽が悪く, 昨年まであった大株で全く発芽しないものも多くあったが, これはカタクリハムシの幼虫の食害によるものであったかも知れない。

上記の標本は国立科学博物館に保管されている。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○奥尻島のネクイハムシ

北海道南西部に位置する奥尻島からは, これまでネクイハムシ類の記録はなかった。しかし, 筆者の一人伊達によりシラハタミズクサハムシ *Plateumaris (Euplateumaris) shirahatai* KIMOTO が採集された。本種は北海道においては分布域は比較的広いが本州では東北地方に局所的にしか分布していない。なお, 採集データは下記の通りである。

1♂2♀♀, 奥尻島ホヤ石林道, 4-6. vii. 1989. (森林総研東北, 横原 寛; 岩手県盛岡市, 伊達 功)

○アカソハムシの東京都からの記録

アカソハムシ *Potaninia cyrtoides* (JACOBY) は関東地方では平野によって神奈川県から昨年初めて記録された。局所的に分布するハムシのため, その報告を見ることが少ない様である。筆者は下記の場所において採集しているので東京都初記録および関東地方2番目の記録として報告しておきたい。

5頭, 東京都青梅市御岳山, 5. vi. 1983, 和泉敦夫採集。

1頭, 東京都青梅市海沢, 23. vii. 1988, 和泉敦夫採集。

いずれもアカソのスイーピングによって得た。

参考文献

平野幸彦 (1990) 月刊誌 (238): 7.

(東京都大田区, 和泉敦夫)

○キイロテントウゴミムシダマシを河川敷で大量に採集

ゴミムシダマシの仲間は多様な形態をしているがキイロテントウゴミムシダマシ *Leiochrodes masidai* NAKANEも名前の示す通りテントウムシに似て円形で、上翅は透明な黄色を呈している。

テントウゴミムシダマシ類の中でもクロホシやニセクロホシは割合に採集例が多いが、本種は採集例が大変少なく、筆者の知っている採集例はNAKANE(1963)¹⁾による模式産地のMiho(sea beach), Shimaneの他、本州では仲田(1982)²⁾による大阪府豊能町(旧豊能村)青貝山付近、高橋(1985)³⁾の兵庫県美囊郡吉川町、林・平野(1987)⁴⁾による神奈川県中郡高麗山、そして九州からは1ヶ所、高井(1985)⁵⁾による福岡県八女郡黒木町の5例だけである。あるいは他からも記録されているかもしれないが、いずれにしても採集例が大変少ないことは確かである。

上記文献での採集状況をもとに、Miho, Shimaneはsea beachとあるから海岸で採集されたのであろうが、海岸のどのような所で採集されたのかは不明である。大阪府の例は青貝山付近とあり、山の中で得られたのであろうか？ 他の3例は採集時の状況が報告されており、兵庫県吉川町では薪から採集され、神奈川県高麗山では落葉の下から、最後の福岡県は台風後の矢部川畔のゴミの下から得られたとある。

さて筆者は今までに本種を5回採集しているので、データを記すと共に、それぞれの採集時の状況を簡単に紹介してみたい。

〔東京都〕1頭、秋川市草花(多摩川河川敷、以下同じ)、29.v.1990; 11頭、八王子市小宮町、26.vii.1990; 17頭、稲城市大丸、10.vi.1990。

〔神奈川県〕1000頭以上、足柄上郡松田町寄(中津川河川敷)、16.iv.1988; 5頭、川崎市多摩区登戸(多摩川河川敷)、30.vi.1990

一般にテントウゴミムシダマシ類は山地の朽木や落葉の下、あるいは苔などから採集されることが多いが、上記5例の採集場所はいずれも河川敷内で、神奈川県松田町を除いて水辺の植物から採集したものである。

東京都秋川市では、ススキの生葉をピーティングしたところ1頭だけ落ちてきた。採集したススキの周辺の石や枯草の下などを調べてみたが追加個体を得ることは出来なかった。

2例目の八王子市小宮町、および川崎市登戸では枯れたススキをピーティングして採集した。

稲城市大丸ではアシ原の一部がオートバイでなぎ倒されて枯れており、その枯れた茎や葉の上で本種を多数発見した。念の為、近くの別のアシ原で自然状態で枯れたアシを調べてみたところ予想通り本種を数頭発見することが出来た。

神奈川県松田町では、野焼きをしたと思われる河川敷の中の大きめの石を起こしたところ、その石の下面、および石に接していた草の根際で1000頭以

上の本種が集合しているのを発見した。なぜ、かくも多数の個体が一ヶ所に集まっていたのかは不明である。

以上、文献記録を含めて10例の採集例を紹介したが、河川敷が6例、山地(?)が3例、そして海岸が1例ということになる。

本種も他のゴミムシダマシ類と同様に腐植物質を食しているのであろうから、腐植物質のあるところなら生息していると考えて良いと思う。ただし、上記の例に見られるように本種を探すには、ある程度の規模を持つ河川敷の枯れたアシやススキなどを調べるのが最も確率が高いように思える。

河川敷と関連の深い甲虫といえば、一般にはゴミムシ類が良く知られており、また、アシ原からはテントウムシの仲間が多数得られることも、これまで良く知られていることである。しかし、どちらかと言うと河川敷は一般の甲虫採集家には余り関心の高い場所とは言えないように思う。今回報告したように、一見、何の変哲もない川原でも丹念に調査を繰り返してみると意外な甲虫が発見出来るかもしれない。

最後に、貴重な文献をご恵与頂いた平野幸彦氏、本種の分布記録についてお教え頂いた近藤茂昭氏に厚くお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) NAKANE, T. (1963) *Fragmenta Coleopterologica*, Pars 6: 26
- 2) 仲田元亮(1982)ゴミムシダマシ科、増補改訂 能勢の昆虫甲虫の部下巻: 91-118
- 3) 高橋寿郎(1985)きべりはむし 13(2): 49.
- 4) 林 長閑・平野幸彦(1987)大磯高麗山自然林の甲虫類、神奈川県指定天然記念物地域動物調査報告書: 129-153.
- 5) 高井 泰(1985)月刊むし(173): 36.
(東京都世田谷区、沢田和宏)

○チビクチプトゾウムシ亜科2種の記録

1. マルムネチビクチプトゾウムシ *Tivicis aearatus* MORIMOTOは1983年、西表島産の1♂2♀♀に基づいて記載され、西表島のみ産することが知られている。筆者は石垣島で採集した本種を保持しているので記録しておく。

1頭、沖縄県石垣島オモト岳、17.iii.1990、奥島雄一採集; 2頭、沖縄県石垣島バンナ岳、21.iii.1990、筆者採集。

2. チビクチプトゾウムシ *Tivicis maculatus* MORIMOTOは前種と同時に記載され石垣島と西表島に産することが知られている。筆者は沖縄本島で採集した本種を保持しているので記録しておく。

2頭、沖縄県国頭村与那、27.iv.1989、筆者採集。
末筆ながら、貴重な標本を提供して下さった奥島雄一氏にお礼申し上げます。

参考文献

森本 桂(1983) *Esakia*, (20): 55-62.

(東京農大、小島弘昭)

○広島県におけるムネダカシモフリコメツキの記録

ムネダカシモフリコメツキ *Actenicerus ohbayashi* OHIRA, 1964 は、岐阜県姪ヶ野高原産の標本に基づいて新種として記載された種で、体長 13 mm 内外、体は幅広く背面は強く膨隆し、真鍮色の光沢を有し、翅鞘には体毛によるまだら状の斑紋は有さない、触角は第 3 節より強く鋸歯状をしている、など本属中では特異な外形のため他種との区別は容易である。少ない種のように、これまで基準産地以外の分布報告は岸井 (1984) が記録した三重県の 1 例があるのみである。

筆者は今回、広島県下で採集された本種標本を検査することができたので報告する。

6♂♂, 芸北町八幡高原, 29. v. 1989. 上野高敏採集。



なお、本種の同定にあたり、基準標本と照合して頂いた大平仁夫博士、ならびに貴重な標本を恵みいただいた上野高敏氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

岸井 尚 (1984) 未記録および珍しいコメツキシ若干について。月刊むし, 166: 21-23.

OHIRA, H. (1964) New or little-known Elateridae from Japan, IX (Coleoptera). *Bull. Japan ent. Acad.* 1(3): 13-14. (大阪市住之江区, 有本久之)

○クワイロジョウカイ、北海道からの記録

クワイロジョウカイ *Stenothemus badius* (KIESENWETTER) の分布は、甲虫図鑑 (III), 日本産昆虫目録 I によると本州、四国、九州となっており、北海道からは未記録と思われる。

筆者は、下記の北海道産の本種の標本を所有しているので、記録しておきたい。

1♂1♀, 北海道三笠市桂沢, 30. vii. 1989, 安藤祐介採集; 1♂, 北海道三笠市美園町, 5. viii. 1989, 安藤祐介採集; 1♀, 北海道三笠市仙太郎沢, 9. viii. 1990, 安藤祐介採集; 1♀, 北海道斜里町硫黄山, 2. viii. 1990, 小島弘昭採集; 3♂♂2♀♀, 北海道湧別町ポン川, 1. viii. 1990, 筆者採集; 1♂5♀♀, 北海道静内町ベテガリ山荘, 7. viii. 1990, 筆者採集。

他のジョウカイボン科甲虫が春から初夏にかけて

出現するのに対し、本種は北海道に限らず、盛夏に出現するようである。上記の標本はすべて緑葉のスイーピングにより得られたものである。

末筆ながら御教示を賜った名古屋女子大の佐藤正孝教授、貴重な標本を提供して下さいました東京農大の小島弘昭氏、安藤祐介氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

原色日本甲虫図鑑 (III) (1985) 保育社。

日本産昆虫総目録 I (1989) 九州大学農学部昆虫学教室, 日本野生生物研究センター。

(東京農大, 奥島雄一)

○新潟県未記録の甲虫 (2)

1. フタモンハバビロオオキノコ *Tritoma biplagiata* (LEWIS)

これまでに新潟県からは、疑問種としてのタイショウオオキノコを含む 22 種のオオキノコムシが知られている (小池 1978) が、その後新たな種の報告はない。最近、未記録であった本種を下記のとおり採集したので記録しておきたい。

1 頭, 新発田市松岡 (メッシュ番号 5639-62-68), 22. iv. 1990.

2. キムネマルハナノミ *Helodes protecta* HAROLD.

県下からのマルハナノミ科の記録は見当たらないので報告しておくが、この個体は大図鑑の記述と多少相違する点があるので、簡単にその特徴を記しておきたい。体長 4 mm, 頭部、上翅は黒色、前胸は黄色で半透明、口枝、触角基部 2 節および肢は黄褐、中、後肢はやや暗色を帯びる、腹部は末端 2 節全部とこれに続く 2 節の中央部が黄褐色で他は触角残節と共に暗褐色である。

1 頭, 新発田市松岡 (同上), 22. iv. 1990.

3. クロモンシデムシモドキ *Trigonodemus lebioides* (KRAATZ).

一見ツヤシデムシの或る種の様感のある、およそハネカクシらしくない種であるが、他に紛らわしい種もないよである。ペルレーゼで下記の 1 頭を得た。

1 頭, 新発田市大倉沢 (5639-64-07), 7. x. 1990.

(新潟県新発田市, 小池 寛)

◇会員動静◇

◎住所変更

上田 功 560 豊中市蛍ヶ池西町 3-555 大阪空港神戸植物防疫所伊丹支所

上野輝久 903-01 西原町千原 1 琉球大学農学部昆虫学教室

山田敏直 454 名古屋市千川区戸田ゆたか 1-303 (表示変更)

山崎裕志 156 世田谷区船橋 1-13-7 フィルストハイム 207 号

遊磨正秀 520 大津市京町 4-1-1 滋賀県教育委員会文化振興課

○エゾクロナガオサムシの雌雄型

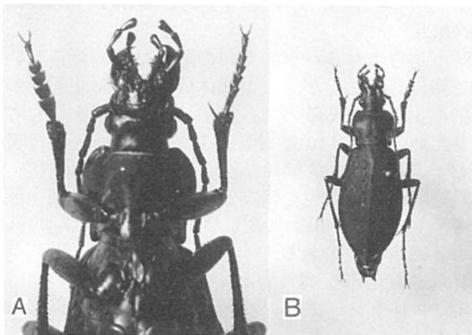
雌雄の特徴を併せもつエゾクロナガオサムシ *Leptocarabus arboreus arboreus* を見出したので記録しておく。写真A(腹面)で明らかのように、左前肢(写真Aでは右方)跗節は♀のもので第1-4節は拡大しない。一方右前肢(写真Aでは左方)は跗節が拡大し、下面に完全に発達した絨毛をもち♂の特徴を示す。内方の脛節端棘(最長のもの)を欠くのは、何らかの原因で基部近くで折れたからで関係はない。触角(15.5mm)は同大の他の♂(17mm)よりわずかに短かく、♀とはほぼ同長で♀の特徴を示すと思われる。第5節以下は茶褐色の細毛を生ずる。ゲニタリアは dissect していないが、外観は♀に近いようである。データなど下記のとおり。

エゾクロナガオサムシ雌雄型(写真A, B)

北海道日高支庁新冠, 22. vii. 1990, 石渡禎一採集。

体長 28 mm (口器, 押出したゲニタリアを除く)
触角の長さ 15.5 mm

異常に気付かれた上、本個体を私に提供された石渡禎一氏、御教示をいただいた黒沢良彦博士にお礼申し上げます。



(神奈川県逗子市, 森下和彦)

○ウスキボシハナノミの横浜市緑区の記録

〈田園都市線甲虫シリーズ その4〉

高桑氏によれば、ウスキボシハナノミ *Hoshihananomia kurosai* CHUJO et NAKANE は神奈川県では2例しか採集例がないとのことであるが、筆者は本種を、雑木林が若干残された住宅街で採集しているので報告する。

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
振替 東京(3) 21129
電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)
FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

1♂, 横浜市緑区柿木台, 24. vii. 1990, 大木採集。
採集地は鶴見川から1km程離れたテニスコートである。最寄り駅は田園都市線藤ヶ丘。晴れた日の正午頃、飛翔中のものを手づかみで得た。雑木林が急激に減少している緑区においては、テニスコートも結構な採集地であり、別の機会に、他の採集例もまとめて報告したい。

なお田園都市線甲虫シリーズその1(甲虫ニュース, Nos. 87, 88)で紹介した、田園都市線江田駅前の土場は、坪単価、数百万円に堪え切れず、1990年1月について駐車場と化し、同地に生息していた昆虫は消滅した。本紙の紙面をお借りして、同地に生息していた、キマダラカミキリ、ホソトラカミキリ、ムネアカクロコメツキ(目撃)ほか、多数の甲虫たちの冥福を祈りたい。

参考文献

高桑正敏(1990)神奈川県産の注目すべき甲虫若干、
神奈川県自然誌資料(11) 121~124,
(横浜市緑区, 大木 裕)

◇編集後記◇

益本仁雄氏がかかっている「タイ病」に小生も感染してしまい、1月にもチェンマイへ行って来た。4月にも行きたい。「なぜなの?、虫?、それとも♀?」、もちろんゲンゴロウさ。本誌の短報にもゲンゴロウに関するものが続々と…。「ゲンゴロウ特集号」みたい。しかし、これが最近の潮流なのだ!!おかげで自分の原稿はまたボツになった。

◇「ニュース」の原稿送付先◇

143 東京都大田区南馬込 1-38-6, 阿部光典
Tel. 03-3771-1065

日本鞘翅学会

会費(一ケ年)5000円, 次号は1991年6月下旬発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1
国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364) 2311, 振替 東京 8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850(以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25
電話(03) 3811-4547, 振替 6-113479